# 課外授業

Teaching the Teacher *by Rocketeea*

## 1

ジョーは初めての仕事に燃えていた。

彼は二十四歳、大学を卒業し、教職に就いた。髪の毛を短く刈り、眼鏡をやめてコンタクトをはめ、十一年生（日本の高校二年生）を教えることになったのだ。新米だが野心に溢れていた。

八月も終わりに近づいた新学期の初日。初めて教壇に立つとあって、ジョーは少しナーバスになっていた。ほんの五年前、彼自身が高校生だったのだ。当時の彼はスポーツマンで、フットボールに明け暮れる毎日だった。成績も優秀だった。ただ、異性関係には恵まれていなかった。

ジョーは、いい教師になろうと努力した。最初の授業で、自分のＥメールのアドレスと自宅の電話番号を生徒たちに教え、分からないことがあったり、助けが必要なことがあったら、いつでも連絡してくれ、と付け加えた。

ジョーは郊外の静かな住宅地に家を借り、一人ぐらしをしていた。近所には何人かの生徒が住んでいるはずだったが、彼は遅くまで学校で過ごし、帰宅後の外出は滅多にしなかったから、生徒たちを見かけることはなかった。

生徒たちは、ジョーを気に入ったようだった。ジョーは公平で、生徒たちが授業に興味を持つ

よう工夫を凝らしていた。ただ、講義をしながら、ふと心が乱れることがあった。女子生徒たちのミニスカートや、タイトなシャツやブラウスなどに、神経を奪われがちだった。恋人がいない彼にとっては、仕方のないことだったのだが。

ある日の放課後、生徒の一人がジョーを訊ねてきた。ティアというスポーツウーマンタイプの女子生徒だった。彼女は、学校のスポーツクラブには所属していなかったが、ときどきジムに通っているようだった。

彼女の黒いスカートの裾から、長い、しなやかな脚が伸び、プラットフォーム・サンダルを履いていた。豊かな胸が、タイトなブラウスを押し上げている。

彼女は、新学期最初のテストで期待していたよりも悪い点をとってしまった。だから、勉強を手伝ってほしいと言った。

ジョーは、チューターに頼めばどうか、と提案した。だが、彼女はその提案を拒否し、チューターに相談できる時間と、彼女のスケジュールが合わないのだと理由を述べた。

ティアは、ジョーの家のすぐそばに住んでいた。今夜、行ってもいいか、と訊ねた。ジョーは少し躊躇ったが、いいよ、と答えた。困ったことがあったら、いつでも相談に来ていい、と生徒たちに言った手前、断れなかった。

その日は金曜日だった。かっきり六時半にドアベルが鳴った。ティアは、さきほどと同じ服装



をしていた。

ジョーはティアを招き入れ、椅子を勧めた。ジョーの家のリビングは、豪華という形容詞には程遠いが、居心地がよく、カウチと古い椅子が幾つか置いてあった。ジョーは椅子に腰掛け、ティアはカウチに座った。ジョーは、ティアが、アップにしていたみごとなブロンドの髪をほどいているのに気づいた。

ティアは、時間をかけて、現在授業に使われている教材が、いかに難しすぎるかを説明した。彼女が喋っている間、ジョーの視線は、組まれたティアの長い脚にしばしば釘付けとなった。片方の爪先が、小さな円を描いて動いていた。きれいな足の爪は赤くマニキュアを施されていた。爪の手入れも怠っていないようだった。

不意に、その爪先が軽く、ジョーの膝を撫でた。ジョーは妄想から覚醒し、はっとして顔をあげた。ジョーのペニスはすでに勃起していた。

時すでに遅しだった。ティアは勃起に気づいていた。

「信じられない！」

彼女は立ち上がって叫んだ。

「教えてくれるって言うから来たのに、いやらしいこと考えてる！」

ティアは立ち上がった。

「す、すまない……」

ジョーは口ごもり、立ち上がった。
「じ、自分ではどうしようもなかったんだ。勘弁してくれ」
ティアはしばらく考え込み、静かに口を開いた。
「なにを勘弁しろって言うの？」
「あ……いや……その、ぼくは新米だし、いまは試用期間中だし、だから……」
「だから、なに？」
ティアは軽く微笑んだ。
「わかった。でも、罰として……」
彼女は、ジョーの股間を指さして言った。
「私の命令に全て従うこと。そうしてくれれば、忘れてあげる」
「あ、ああ……」
従うしかなかった。
するとティアは、ズボンを脱ぐように命じた。
「え？」
ジョーは言った。
「ず、ズボンを……？」
「私の命令に従うって言ったはずでしょ？」



ジョーは、躊躇いながらベルトを外した。ズボンが床に落ちた。勃起したペニスが、白いブリーフを押し上げている。
「ブリーフも脱いで！」
ティアが怒鳴った。ジョーはブリーフを脱ぎ、すでに萎縮したペニスと、ぶらぶらと垂れ下がった陰嚢をさらけ出した。
ジョーは、女子生徒に性器を見られ、顔から火が出るようだった。なぜ、ノーと言えなかったのだろう？　なぜ十七歳の女の子に屈伏しなければならないのだろう？
「脚を広げて」
ティアが言った。ジョーは従った。肩幅くらいに脚を広げた。
「両手を腰にあてて」
ジョーは命令にしたがった。彼女は右手を差し出した。ジョーのペニスは、彼女のやわらかな手に包まれた。快感が走った。彼女は、ジョーのペニスを優しく愛撫しはじめたのだ。いったん、柔らかく縮こまったペニスは、その海綿体に血液が充満し、固く膨張しはじめた。ジョーは呼吸を見出した。いまにも射精しそうだった。
勃起が頂点に達したとき、ティアは一歩後ろに下がり、思い切り脚をはねあげた。白いサンダルがジョーの睾丸に叩きつけられ、彼女の爪先とジョーの腰骨との間でひしゃげた。
ジョーの全身を、鋭い激痛が貫いた。股間と下腹部が焼けただれたように激しく痛んだ。

ジョーは床に倒れた。

ティアは、ジョーのベルトを拾い上げ、突っ伏したジョーの両腕を後ろに回し、縛り上げた。ジョーは、激しく痛む睾丸を手で庇うことすらできなくなった。

「先生、どうしたの？　金玉が痛いの？」

ティアが訊ねた。驚いたことに、ティアはパンティを脱ぎ、それを丸めて、信じがたい激痛のため開かれたジョーの口に突っ込んだのだ。

そして、ジョーの睾丸に足を乗せ、ぐりぐりと力をこめた。ジョーはまたも激痛に悲鳴をあげた。だが、悲鳴は塞がれた彼の口のなかでくぐもった。

ティアは、ジョーの睾丸から足を離し、冷蔵庫に歩み寄り、ビールの缶を持って戻ってきて、飲みはじめた。

やっと、ジョーは落ち着きを取り戻したが、睾丸はまだ痛んでいた。

「立ちな」

ティアはそう言いながら、手を差し延べて彼の腕をつかんで引っ張り起こした。そして、缶ビールを置くと、睾丸を握った。ジョーは、最初に蹴られたときの激痛を思い出し、びくりと身を竦ませた。

ティアは、両手で一個ずつ睾丸を握り、ひねったり、掌で転がしたりした。腫れ上がってはいたが、まだ睾丸はその形を保っていた。

ティアは楽しげに睾丸を待て遊んだ。お楽しみはこれから、というように……。



## 2

ジョーは、ティアがやわらかな手で腫れ上がった睾丸を弄ぶ度に、身をよじり、顔を歪めた。彼は、窮地に立たされていた。両手を縛られ、両足首に絡まったズボンとブリーフのため、自由に歩くこともできないのだ。その傍らには、彼の睾丸を蹴りあげた十七歳の美少女が楽しげに立っている。

ティアは、ジョーの睾丸から手を離し、歩み去った。電話のダイヤルを押す音が聞こえてきた。つづいて、ティアが喋りはじめた。何を行っているかはよく聞きとれなかったが、誰かをここへ呼んでいるらしかった。

「びっくりさせちゃうんだから……」

それから数分ほど喋った後、彼女は戻ってきた。

ジョーはまだ痛みに苛まれながらも、必死に床を転げ回って、起き上がろうともがいていた。

「ちょっと、どこに行く気？」

返事はできなかった。口のなかにパンティを詰め込まれているのだから。

ティアは部屋を見舞わし、床に落ちていたタオルを拾い上げ、ジョーの頭に巻き付けて目隠しをした。それから、カウチの真ん前まで引きずり、腹這いにさせた。

ティアはジョーの背後に回り、両脚のつけ根から床に垂れている陰嚢を、右足のサンダルで踏みつけた。ジョーの睾丸は、恐ろしい重圧から逃れようと、陰嚢のなかを逃げ回ったが、ティアは巧みにサンダルの位置を変えて、踏みつづけた。

彼女は、明らかに楽しんでいた。新米教師は、ティアが与える激痛によって完全に屈伏していた。ジョーにとっては一時間も責め苛まれたような錯覚に襲われたが、実は数分間にすぎない。

ふと、ドアがノックされた。ティアが叫んだ。

「入って！」

ドアが開いた。そこに立っていたのは、ティアの妹の八年生（日本の中学二年生にあたる）のヘザーだった。姉に似た美少女だった。

ティアはジョーに言った。

「見て。私の妹よ。まだ男の金玉を見たことも触ったこともないの。あんたも先生なんだから、ちゃんと妹に、男の生理学を教えてほしいんだよね。もっとも実験台になってくれればいいんだから、楽なものでしょ？　実演はヘザーがやるから。私がいいと言うまで、叫んだり、何か喋ったりしちゃだめよ。もし、何か言ったりしたら、あんたの大事な金玉の安全は保証しないからね」

ティアは、ジョーの口からパンティを引き抜き、立たせた。ジョーは魂が抜かれたようにうつ



ろな表情だった。彼の睾丸は腫れあがり、通常よりも三分の一は大きくなっていた。ジョーは目隠しをされていたから、ヘザーの外見は分からなかったが、ティアよりも若いことは確実だろう。

彼は、混乱し、恐怖におののいていた。教え子とその妹の前で、両手を縛られ、目隠しをされ、言うなりになるしかないのだ。

ヘザーの手が、彼のペニスに触れ、愛撫を始めた。最初はこわごわと不器用だったが、やがて慣れた。ジョーのペニスは、再び勃起しはじめた。

ヘザーがくすくす笑いながら言った。

「こんなにおっきくなるんだねえ」

ティアはヘザーにマジックペンを渡し，

「なんか書いて」

と言った。ヘザーは、肉棒に「おちんちん」と書き、姉を見て大笑いした。それから、両方の睾丸にそれぞれ「右の玉」「左の玉」と書き、

「ね、射精するとこ見たい！」

と言った。

「オッケー」

ティアはそう言い、ジョーのペニスを握りしめ、上下にしごきはじめた。ジョーはすぐに喘ぎはじめた。精液が勢いよく噴出し、ヘザーのミニスカートにかかった。

「あちゃ！」
ヘザーが叫んだ。
「ちょっとお、汚いじゃない。ちゃんときれいにしなよ！」
ティアはジョーの目隠しを外して命令した。
「なめろ！　ちゃんときれいにしないと、潰すぞ！」
ジョーは、恥ずかしさと屈辱感に震えながら、ひざまずいて、ヘザーのスカートにしたたる自分の精液を嘗めはじめた。
ヘザーも姉と同様、きれいな長い脚をしていた。姉ほど発達はしていなかったが、年齢に相応しく、ういういしい滑らかな肌をしていた。
「おいたをしたんだから、ちゃんと叱らないといけないよね」
ヘサーが目を輝かせていった。
「こいつの金玉、蹴ってもいい？」
「いいよ」
ティアが答え、ジョーの腕をつかんで立たせた。それから、両脚の内側を蹴って、広げさせた。腫れ上がった睾丸がぶらぶらと揺れた。
ヘザーは履いていたサンダルを脱ぎ、腰に手をあててジョーの前に立ち、言った。
「ほんと気分悪いよね。あんたにはもっとひどい目に合わせてあげる」



言うなり、思い切り脚を蹴りあげた。足の甲が睾丸に叩きつけられた。みごとに命中し、睾丸が一瞬、平たくなった。
ジョーは激しく痙攣し、それから床にくずおれた。ヘザーは歓声をあげた。ジョーは体を折り曲げ、転がって悶絶した。
ヘザーは明るく笑った。脚のつけ根が濡れるのを感じていた。男の急所を蹴り上げ、恐ろしい苦痛を味わわせることが、こんなに楽しいことだとは！
ジョーは、その姿勢のまま動くこともできなかった。ヘザーとティアはカウチに並んで座り、この後、どうやって楽しもうかと相談を開始した。

## 3

ジョーが床に横たわり、最前に受けたばかりの恐ろしい打撃から立ち直ろうともがいている間、ヘザーとティアは、お楽しみをつづけるための道具はないかと、ジョーの家じゅうを物色していした。二人は、軽いロープと、最近ジョーが買ったハンディなデジタル・ビデオカメラを見つけた。
二人はそれらを手に戻ってきて、ジョーがさきほどと同じ場所に転がって悶絶しているのを確認した。ジョーの両手は背中に回され、縛られていた。もはや彼には、二人の少女に抵抗する術

はなかった。そうでなくても、急所をひどく蹴られて、弱っていたのだから。
ティアとヘザーは、ロープで陰嚢の根元をきつく縛った。彼の睾丸は何度も蹴られたり踏まれたりで腫れ上がっていた。
縛り終わると、ティアはデジカメを取り上げ、録画の準備を始めた。ヘザーはジョーに、跪くように命令し、ジョーは否も応ももなく従った。ヘザーは次に、お辞儀して足を嘗めろ、と命じた。他に道はない。ジョーは体を前に倒して、ヘザーの素足にキスした。
すると、ヘザーはロープを引っ張り、むりやりジョーを立たせた。ロープがジョーの睾丸に食い込み、耐えがたい激痛がジョーを襲った。ヘザーは、顔を苦痛に歪めるジョーに平然と、ロープに跨がり、向こうを向くように命令した。ジョーは言いつけに従った。するとヘザーは、全力でロープを引っ張るように命じた。ジョーは苦痛を堪えながら、ロープの端を握るヘザーから離れるように足を踏み出した。陰嚢がちぎれそうになりながら伸びていった。カメラを構えるティアは面白がって囃したてた。
「いい映像だね！」
実際、瓢箪のように限界まで伸びきった玉袋は、滑稽というしかなかったが、ジョーにとってはそれどころではなかった。
と、ヘザーがロープを手から離した。ジョーはバランスを失ってつんのめり、仰向けに倒れた。まともに床に顔面を打ちつけた。



ヘザー、いい年した大人の男が素っ裸で顔を床につけて転がり、その股間からロープが伸びている様に、大喜びして哄笑した。それから、ジョーのロープをほどいた。
ティアが録画をやめ、歩み寄ってきた。彼女はジョーに、立ちなさい、と命令した。ジョーは彼女の助けを借りて、やっとなんとか立ち上がった。すると彼女は、
「取り引きしない？」
と言った。
「先生、だいぶ弱ってるみたいだから、チャンスをあげる」
すなわち、十四歳のヘザーと「戦って」、もしジョーが負ければ、ティアの成績は「A」にすることと、今年いっぱい週末は必ず、ティアとヘザーに「玉遊び」させる権利を与えること。
「もし先生が勝ったら、これ以上、玉を苛めるのはやめてあげる。それに、なんならフェラチオしてあげてもいいよ」
ジョーは返事をしなかった。返事をする気力も残っていなかったのだ。
一方、ヘザーは叫び声をあげ、混乱した目で姉を見た。
「なんでそんなことしなくちゃいけないの？　もし私が負けたら、どうなるのよ？」
「相手にチャンスを与えるのが、フェアってもんじゃない？」
ジョーは同意するしかなかった。取り引きに応じる以外に、恐ろしい責め苦から逃れる術はないのだから。

ティアはジョーの両手を縛ったロープをほどいた。彼はすぐに、左右の睾丸に触れ、回復不能に陥っていないか調べた。陰嚢は傷だらけで、睾丸は腫れ上がっていたが、さいわい、潰れてはいないようだった。まだ激痛が全身を掻きむしっていたが、縛られていさえいなかったら、十四歳の少女相手になんとでもなるだろう。ジョーはそう考えた。もし勝てば、男性機能が無事なまま解放してくれる。みごとな胸と脚をもつ美少女にフェラチオしてもらえるのだ。もし負ければ……彼の男性としての人生は早晩終わりを告げるだろう。だが、今は賭けるしかないのだ。

ヘザーは、ミニスカートのままだったが、Tシャツを脱いでスポーツブラになった。姉ほどの巨乳ではなかったが、年齢にしては豊かな引き締まった乳房だった。

ティアはデビカメを取り上げ、外でやろう、と言った。

ジョーの庭はフェンスに囲まれていて外からは見えない。夜中なので外は真っ暗だったが、庭全体を照らせるだけの大きな照明灯があった。芝生に覆われているので、格闘にはもってこいだった。

ジョーが外に出るために足を動かす度に、睾丸が太股に触れ、鋭い痛みが走った。彼は、庭の中央で立ち止まり、ヘザーと向かい合った。ティアはカメラを構え、録画の用意をした。

ヘザーは微笑んだ。彼女の唇が残忍に歪んだ。

「いくよ、負け犬」

言うなり、ヘザーは前に踏み出した。ジョーは反射的に、両手で股間を覆った。



ヘザーは余裕たっぷりに笑いながら、ジョーの腹にパンチを浴びせた。普通なら、ジョーのような筋肉質の男にはたいしてこたえないパンチだったが、すでに弱っていた彼にとっては十分に効果的だった。嘔吐を覚えた。

ジョーは必死に体を動かしてブロックし、ヘザーに足払いをかけた。ヘザーはつんのめって仰向けに倒れた。ジョーは彼女にのしかかろうとした。だがヘザーはすばやく、膝をたてた。ジョーの腹部に膝が打ち込まれるかたちとなった。ジョーは呻いた。なんとか転がってヘザーから離れ、立ち上がった。

ヘザーはすでに立ち上がって、ジョーに対峙していた。ジョーは、今度は自分から攻撃を仕掛けた。彼女に飛び掛かり、首をつかんだ。だが、ヘザーは慌てなかった。急所はがらあきなのだ。

ヘザーはジョーの睾丸をつかみ、思い切りひねりあげた。ジョーは悲鳴をあげ、彼女から離れ、体を折り曲げた。その後頭部にヘザーは手刀を浴びせた。ジョーはうつ伏せに倒れた。顔を芝につけ、四つん這いになった。突き出した尻の下に、腫れ上がった陰嚢がぶらさがっていた。

ヘザーはすかさず、背後から、ぶらぶらする睾丸に、見事なキックを放った。全身の力を爪先にこめた。完璧な蹴りが、凄まじい打撃と激痛を睾丸に与えた。

ジョーの体が一瞬のけぞり、激しく痙攣し、それからばたりと蛙のように芝生にのびて、動かなくなった。

彼は失神していた。